

回  
想

## 『哲学研究』の思い出

小 田 武

向いに住んでいた家内の父で日本画家の佐野五風がなくなつて五年あまりたった昨今、その画室を家内と整理していると、一冊の『哲学研究』が出てきた。結婚して間もなく父に私の論文ののっている号を贈つたものが、こうして私の手もとにもどることになったのである。これを機に、秋の夜ながを『哲学研究』の思い出にふけることにしたい。

今年はカント没後百八十年にあたっているが、表紙に時の経過をおもわせるこの帰つてきた『哲学研究』は、昭和二十三年二月発行のもので、カントの徳育の人間学についての私の論文がふくまれているのである。

『哲学研究』との私の縁は、京都の街の古本屋で大先輩方の研究に接することのできるバックナンバーの数冊を手にした時にはじまる。そしてやがて、卒業論文のテーマとしてとり上げたシラーの美的教育論についての私の研究が『哲学研究』に掲載された。このシラーの研究からさらにカントの徳育論にとり

組むようになったところが、私の充実した青春時代である。

ところで、昭和二十年代の前半、『哲学研究』にシラー研究を発表したのは、美学専攻の金田民夫氏と倫理学専攻の吉田忠勝氏と教育学専攻の私とである、同じころにそれぞれの研究室で研究をつづけ、その後三人とも京都の地をはなれなかったということが、両氏と私との縁を深めることになった。私の長女は同志社大学文学部で美学を専攻することになって、ながらも同志社大学の美学芸術学研究室の中心として活躍してこられた金田教授の指導を受け、卒業論文にカント美学をとり上げた。

また、私自身は吉田氏から出講を依頼されて、この十数年京都府立医科大学の附属看護専門学校で教育学の講義をつづけている。これも京都府立医大教授として吉田氏が活躍しておられたからである。

なお、『哲学研究』の編集者としての思い出をすこしばかり語ってみよう。

私は戦後、二十年代に、二年あまり編集に当たった。当時、美学の上野照夫先生が京都哲学会の会計委員をしておられたので、編集についてもいろいろ助言してくださり、実務のこまかいところは発行所であった弘文堂の鈴鹿氏のお世話になった。美学の植田寿蔵先生は、かつて『哲学研究』の編集委員をなさったときいていたが、まとめてくださった或る原稿をお宅までいただきにあげたときのことである。出かける前に、上野先生からつぎのようなお話があった。それは、植田先生宅でお茶のもてなしがあれば、すぐお茶をいただいてしまわないとお

茶のみぶりを観察されてしまうということであった。先生宅でお茶が出されると、すばやく私がお茶をいただいてしまったので、「君は聞いて来ましたね」とおっしゃって笑顔をなさった。

いただいた原稿には句読点と改行が比較的多かった。校正の時、印刷所での少々、時には十数字の脱字を、たやすく訂正するための配慮がなされていることにやがて気づいたことである。

もうひとりなつかしい思い出のある執筆者は、哲学科で同期の山田晶氏である。当時アウグスチヌスの研究を『哲学研究』に連載させてもらっていたので、京大に近い下宿にたびたび訪ねていった。

昭和十九年の秋に、私は哲学科を卒業した。今年で四十年の春秋を経たことになる。私の研究の出発点がシラーの美的教育論であったことをおもい、シラーの歓喜のうたを歌いつつ、近く七十周年を迎える京都哲学会の今後の発展と『哲学研究』の益々の充実を祈ろう。(昭和五十九年十二月稿)

(筆者おだ・たけし)

香川大学教育学部「教育学」教授)

〔編輯者後記 筆者の小田武教授は『哲学研究』の編輯を第三六五号(昭和二十二年十二月十日発行)から第三九二号(同二十五年四月一日発行)まで担当された。本京都哲学会はさきに第五百五十号の刊行を祝したので、草創七十年のために特別の行事は挙行しなかったが、同教授のこの回想録

を以て、創業以来七十年の歴史の一端を偲ぶことにしたい。〕

| 告 予 文 論 号 次            |   |  |   |
|------------------------|---|--|---|
| ヘーゲル『論理学』の理解のために……………酒 | 井 |  | 修 |
| ——解釈史からの反省——           |   |  |   |
| マルブランシュの天使論と悪魔論……………依  | 田 |  | 義 |
| 歴史と世界……………早            | 瀬 |  | 明 |
| ——青年ヘーゲルの経験            |   |  |   |
| フィヒテ哲学の上り道に            |   |  |   |
| おける自覚……………阿            | 部 |  | 子 |
| 〔討議〕                   |   |  |   |
| 情報の物理学と哲学……………品        | 川 |  | 嘉 |
| ——大庭健氏の批評に答える——        |   |  | 也 |